

フルトヴェングラーとヒトラー

～この日の演奏会について

中川右介

1933年に政権を獲得したナチスは、総統ヒトラーの誕生日である4月20日を国の祝日とした。しかし、この時点では総統誕生日と第九とは何の関係もない。

フルトヴェングラーはナチス政権がコンサートやオペラ公演のプログラムに介入してくることに抗議し、1934年秋、すべての公職を辞任した。だがゲッベルスとの交渉の結果、35年3月に復帰を決める。そして4月25日、ベルリン・フィルハーモニーへの復帰コンサートを指揮した。フルトヴェングラーがステージに登場するとすさまじい拍手が何分も続き、演奏が始められないほどだった。聴衆はフルトヴェングラーが政権と闘ったことへ賛辞を贈ったのだ。

ヒトラーがゲッベルスら政権幹部を引き連れてベルリン・フィルの演奏会へやって来たのは、5月3日の公演である。フルトヴェングラーは本番の直前になってヒトラーたちが来ていることを知らされ、激怒した。しかし、いまさらキャンセルはできなかった。こうして、フルトヴェングラーは予期せぬかたちで御前演奏をする羽目になった。客席最前列に座るヒトラーに、お辞儀をするフルトヴェングラー——ナチスの専属カメラマンはこのシャッターチャンスを逃さなかった。ナチスと闘った末の凱旋公演は、ナチスとの妥協の象徴となってしまった。

フルトヴェングラーとヒトラーが握手をした写真が撮られたのは、その半年後の10月下旬だった。ベルリン・フィルとよく共演していたブルーノ・キッテル合唱団の資金集めのための第九のコンサートに、ヒトラーがやって来たのだ。そして

今度は、ヒトラーは演奏が終わると上がり、舞台に近づくと、フルトヴェングラーに手を差し伸べた。フルトヴェングラーは握手を拒めず、までも写真が撮られた。

ここにおいて、ヒトラー、フルトヴェングラー、第九が揃った。

1937年3月25日、フルトヴェングラーはロンドンへ客演し、ロンドン・フィルハーモニックを指揮し、ベートーヴェンの第九を演奏した。このロンドンへの客演は、5月と6月にコヴェント・ガーデンで《指環》四部作を指揮することになっていたもので、その顔合わせでもあった。当時のコヴェント・ガーデンのピットには、ロンドン・フィルが入っていたのだ。

ロンドン・フィルとの顔合わせはうまくいった。フルトヴェングラーはベルリンへいったん戻り、4月18日と19日に、今度はベルリン・フィルと「第九」を演奏した。ソリス

トはロンドンの顔ぶれと同じだった（ベルガー、ピッツィンガー、ルートヴィッヒ、ヴァッケで、1942年のソリストと3人が重なる）。

5月1日、今度はベルリン・フィルを引き連れてロンドンで第九を指揮した。この日の演奏は録音され、現存するフルトヴェングラーの最古の第九となる。つまり、この年は3月25日から5月1日までに4回の第九があった。

しかし、そのうちのベルリンでの2回は、偶然にもヒトラーの誕生日（4月20日）の前々日と前日だった。ナチス機関紙は「戦い、苦闘、征服と歓喜の勝利を謳いあげるベートーヴェンの第九は、総統の誕生日に対してまさに象徴的な関連性を示した」と書きたてた。

こうして、ヒトラー誕生日と第九が結びついてしまった。

フルトヴェングラーは、しかし、二度と第九と総統誕生日とが結びつかないよ

う、そして自分がヒトラーを祝っていると思われないう、その後は、総統誕生日にはベルリンにいないようにスケジュールを組む。ゲッベルスは苦々しく思っていたが、強制することはできなかった。ベルリン・フィルはフルトヴェングラー以外の指揮者で、祝賀演奏会を開いていた。もっとも、正式にはそういう名称の演奏会ではなかったともいう。

1942年になると戦況は悪化し、ドイツは総力戦へと突入していた。ゲッベルスは焦っていた。ナチス政権には派手な催しが必要だった。ドイツにはまだ力があることを内外に示さなければならぬ。そのためには、なんとしても、「フルトヴェングラー指揮」の「第九」でなければならない。

一方、ブルーノ・キッテル合唱団はこの年が創立40周年で、3月21日から24日ま

で、記念演奏会を開き、ベルリン・フィルがフルトヴェングラーの指揮で第九を演奏した。これも演奏が録音されている。

この年はウィーン・フィルハーモニーの創立100周年でもあり、フルトヴェングラーはベルリンでの第九を終えると、ウィーンへ向かった。28日が記念式典で、29日と30日はブルックナーの八番を演奏、その後の記念演奏会でも第九が演奏されることになっていた。フルトヴェングラーとしては、ウィーンでの第九を演奏する予定であることと、ベルリンでは3月下旬に第九を演奏したばかりであることも付け加えれば、4月20日前後の「ベルリンでの第九」を回避できると考えていた。

だが、フルトヴェングラーの思惑は外れた。この年のゲッベルスは強硬だった。3月の第九が評判がよかったことが、フルトヴェングラーにとって仇となった。ゲッベルスはウィーンにいるフルトヴェン

グラーへ電話をかけた。「総統は3月の第九が絶賛されたことを耳にし、誕生日の前夜に演奏するよう望んでいる」

フルトヴェングラーがウィーンでの予定があると言って断ると、ゲッベルスはウィーン総督兼帝国大管区指導者シーラハにも圧力をかけ、ウィーンでの公演を延期させるよう求めた。結局、ウィーンでの第九は21日から24日へと延期され、4月19日、フルトヴェングラーはしぶしぶベルリンのフィルハーモニー楽堂の指揮台に立つことになった。

4月19日の演奏はドイツ全土にラジオで放送された。そのため、録音が遺っているのだ。ホールには、政府と党の幹部が揃い、さらに国防軍の将校や兵士もいた。各国の外交団もいた。まさに、国家的行事だった。だが、フルトヴェングラーの第九を聴きたがっていたはずのヒ

トラーの姿は、フィルハーモニー楽堂のどこにもなかった。演奏後にフルトヴェングラーと握手をしたのは啓蒙宣伝大臣ゲッベルスである。ヒトラーは総統大本営「狼の巣」に籠っていたのだ。

ゲッベルスは長い演説をしてヒトラーを讃えた。その演説の前後に、オーケストラはフルトヴェングラーの指揮で、パッハのニ長調組曲のアリアを演奏し、最後が第九だった。

ドイチュェ・アルゲマイネ・ツァイトウング紙はこう報じた。「音楽界最大の天才ベートーヴェンの高貴なこの作品は、総統の誕生日にあたり、国民が偉大な規範に従い、たとえいかに厳しいものであっても時代の危機と運命を乗り越えていこうとしていることを、総統に対し象徴的に示したものである。ベートーヴェンの作品は、この瞬間に、この日熱烈なる祝意をもって総統に近づいた何百万の

人々の心を高め、奮起させた」

ゲッベルスはこの日の第九について日記にこう記している。

「完璧な演奏で、圧倒的な印象を残した」

翌1943年、戦況はますます悪化していたが、ゲッベルスはこの年も総統誕生日祝賀演奏会を開催するつもりだった。それを予期したフルトヴェングラーは珍しく、かなり「政治的」な行動をとった。

まず、それまでゲッベルスから求められながらも断っていた、占領地であるフランスと、友好国であるスペインへのツアーを引き受け、3月と4月に予定された。ゲッベルスはフルトヴェングラーがようやく協力的になったと喜んだ。

ところが、そのツアーの直前になってフルトヴェングラーは病気になった。それは仮病に近かった。フルトヴェングラーは知り合いの医師に診断書を書いても

らい、とても演奏旅行が不可能であると訴えたのだ。フランスとスペインのツアーはキャンセルされた。そして、ベルリンで誕生日祝賀演奏会を振るのも無理だとゲッベルスに伝えた。

ゲッベルスはそんな診断書には騙されなかった。さっさとベルリンへ来いと、ウィーンで療養しているフルトヴェングラーに伝えた。この年はベートーヴェンの《英雄》交響曲の予定だったが、「リハーサルは他の指揮者にやらせておくから、本番だけ振ればいい」とも言った。

フルトヴェングラーは、「総統の誕生日に指揮したいのはやまやまですが、そんなことをしたら、つい先日、断ったばかりの友好国、スペインの人々が気を悪くしないでしょうか」と言った。いまやドイツにとって数少ない味方であるスペインの独裁者フランコ將軍の機嫌を損ねてもいいのか——フルトヴェングラーはこう脅迫

したに等しい。ゲッベルスはフルトヴェングラーにしてやられたのだ。この年と翌年はクナッパーツブッシュが指揮した。

フルトヴェングラーにとって、総統誕生日祝賀演奏会の指揮は1942年のみですんだ。だが、そのたった一回が、戦後の非ナチ化審判において問われるのである。

非ナチ化審判では、当日の録音は証拠物件とはならなかった。もし、このすさまじい迫力の演奏を「証拠」に、「あなたはヒトラーの誕生日を、こんなにも興奮して熱狂して祝っているではないか」と問い詰められたら、フルトヴェングラーはどう答えただろうか。

私が興奮し熱狂していたとしたら、それはあくまでベートーヴェンの音楽に対してである——毅然として、こう言ったことだろう。

戦後、フルトヴェングラーはこう書いている。

「権力そのものではなく、権力の乱用が悪である。ビスマルクではなく、ヒトラーが悪なのだ」